

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23660054

研究課題名(和文) 乳児の離乳に関する母親の意識と実態 食は人をつくる根源

研究課題名(英文) A mother's awareness and the realities of infant weaning

研究代表者

五十嵐 世津子 (IGARASHI, SETSUKO)

弘前大学・保健学研究科・准教授

研究者番号：40250625

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の一つ目の目的として、昭和初期に聞き取り調査で得られた内容をまとめた文献を分析した。その結果、妊娠中に母親が摂取する食物は、胎児や出産後の子どもの健康に影響を及ぼすと考えられていた。二つ目として、子育てを経験した母親たちへのインタビュー調査から、時代の違いによって離乳食に対する考え方に違いがあることが明らかになった。三つ目は、若者の離乳食についての考えをアンケート調査した結果、将来、市販の離乳食を取り入れながら、育児を行うという考えが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The first objective of this study was to analyze literature that summarized data of interview surveys conducted in the early Showa period. Results showed that the food intake of expectant mothers was believed to have an effect on the health of the fetus and the child after birth. Secondly, through interviews of mothers with parenting experience, we found that the opinions on weaning food for babies had changed over time. Thirdly, the results of a questionnaire survey of young adults on their opinions on weaning food for babies showed that they intended to include commercially available weaning food as part of their parenting routine in the future.

研究分野：母性看護学

キーワード：乳児 離乳食 母親

1. 研究開始当初の背景

「食」は人が生きていくうえで必要不可欠であり、基本的欲求である。昨今のわれわれの食生活をみると、すぐに食べることのできるコンビニ弁当、レトルト食品、スーパーでの食材など、自宅での調理をあまり必要としなくても、あるいはわずかの時間で、手軽に食事することが可能な社会となった。同様に、乳児の離乳食についても、スーパーやドラッグストアでの店頭販売がされるようになった。また、月齢毎あるいはその種類も豊富であり、品数も多くなったと思われる。このような状況から、市販の離乳食の利用度が増してきていることがうかがえ、乳児の離乳食のあり方が変化してきていることが推測される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、つぎの3つの視点について明らかにすることである。

(1) 「日本産育習俗資料集成」にみる妊娠中に忌避された食物とその理由

古文獻に記述されている「妊産婦の食事」に関する内容を分析することによって、妊娠中から産褥期の食事と胎児および子どもへの健康や成長への影響との関連性を知ることである。これによって、先人たちの食への考えを明らかにすることができる。

(2) 昭和から平成にかけての三世代間の離乳の移り変わり

高齢者と現代の母親への聞き取り調査によって、先人の離乳に対する考えを明確にするとともに、現代に生きる母親の離乳に関する意識と実態を明らかにするものである。特に、乳児の食生活に焦点をあて、母親の離乳の実際と市販のベビーフードに対する意識と用い方を調査し、今後の離乳のあり方について考えるものである。

(3) 看護学生と栄養学を学ぶ学生の離乳食に対する意識

現代の若者の離乳食に対する意識、特に人の健康に密接に関わる看護学を学ぶ学生と栄養学を学ぶ学生の食生活の捉え方と離乳食に関する関連性を知ることが目的とした。これによって、食に関する教育上の示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 「日本産育習俗資料集成」にみる妊娠中に忌避された食物とその理由

分析資料：昭和初期に全国各地の高齢者を対象に、産育習俗について聞き取り調査を行って出版された「日本産育習俗資料集成」(恩賜財団母子愛育会編第一法規出版)である。『妊婦の食物・禁忌』の項を分析資料とした。

分析の手順：本著書の『妊婦の食物・禁忌』の項をコンピューターに入力した。次に、妊婦が「何を食する」と、胎児や児に「どのような影響があるか」という視点で、一つの食物とそれによる影響が一文になるようにデ

ータを見直し細分化した。次に、食べられていた食物毎に胎児や子どもにどのような影響があるのかを分析しまとめた。

(2) 昭和から平成にかけての三世代間の離乳の移り変わり

研究対象者：実際に昭和初期から平成にかけて、子育てをした母親13人を対象

研究調査：三世代間にわたっての離乳食への考えや実際について半構成的面接法インタビュー調査を行った。

調査時期：平成25年8月～9月

質問項目：年齢、子どもの人数、同居人、離乳食について、ベビーフードを使用したかということなどである。

分析の方法：対象者の発言内容から逐語録を作成し、離乳についての内容を抽出しデータ化を行った。データの意味や内容に焦点を当てながらカテゴリ分類を行った。現在離乳を行っている世代を「現代のママ世代」、その世代から見て母親世代である50～60歳代を「お母さん世代」、70～90歳代を「おばあちゃん世代」と三世代に分類し、世代ごとに着目してさらに分析した。

倫理的配慮：対象者には、得たデータは本研究以外に使用しない、本研究への参加を拒否しても、不利益を被ることはない、個人が特定されないように個人情報保護に万全な配慮をする、録音した機器等のデータは厳密に取り扱う、研究が終了し次第、消去する、対象者の本研究への参加は自由であり、研究途中で参加撤回も自由である、ということを示明し、同意を得た上で面接を行った。

(3) 看護学生と栄養学を学ぶ学生の離乳食に対する意識

調査期間：平成25年10～12月

実施方法：A県内の看護学生と栄養学を学ぶ学生237名を対象とした。

調査項目：無記名自記式アンケート調査を行った。質問紙の内容は、回答者の属性(性別、年齢、兄弟数、同居者)、現在の食事の摂取状況や好み、外食や市販レトルト食品等の利用状況、離乳食のイメージや考え、今後離乳食使用に関する考えなどから構成されている。看護学生と栄養学を学ぶ学生の2群で比較検討した。つぎに、自身の食生活の傾向と市販と離乳食に対する考え(14項目)は、「非常にそう思う」「ややそう思う」を「思う」とし、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を「思わない」の2つに再割り当てを行い、手作りの離乳食に「こだわりがある」「こだわりのない」の2群間で比較・検討した。統計処理にはSPSS Statistics Ver. 20.0を使用し χ^2 検定を行い、有意水準は5%とした。

倫理的配慮：研究の目的と実施方法について、口頭および文書で説明し、学生への調査依頼は強制ではないこと、個人が特定されないこと、拒否によっても不利益のないこと、回答は無記名で行うためプライバシーが保護されること、研究参加を拒否しても成績へ

の影響など不利益が生じないこと、学会等への発表等の内容を口頭と文書で説明し同意を得て行った。

4. 研究成果

(1) 「日本産育習俗資料集成」にみる妊娠中に忌避された食物とその理由

①聞き取った県名と件数

北海道から沖縄までの39県において聞き取り調査がされており、770件の記述項目があった(表1)。さらに、妊婦が「何」を食べると、「どのような影響があるか」という1食物1影響に細分化すると933件のデータが得られ、内容としては主に妊娠中に食すると胎児や子どもへの悪い影響を与えるものとしての内容が多く記述されており、655件の分析用データを得た。

| 県名 | 件数 | 県名 | 件数 |
|------|-----|------|-----|
| 北海道 | 2件 | 兵庫県 | 6件 |
| 青森県 | 1件 | 奈良県 | 32件 |
| 岩手県 | 14件 | 和歌山県 | 4件 |
| 秋田県 | 3件 | 鳥取県 | 27件 |
| 福島県 | 7件 | 島根県 | 17件 |
| 栃木県 | 20件 | 岡山県 | 45件 |
| 群馬県 | 40件 | 広島県 | 12件 |
| 埼玉県 | 3件 | 山口県 | 28件 |
| 千葉県 | 8件 | 徳島県 | 14件 |
| 東京都 | 3件 | 香川県 | 6件 |
| 神奈川県 | 7件 | 愛媛県 | 20件 |
| 新潟県 | 10件 | 福岡県 | 64件 |
| 富山県 | 26件 | 佐賀県 | 3件 |
| 石川県 | 4件 | 長崎県 | 42件 |
| 山梨県 | 22件 | 熊本県 | 3件 |
| 長野県 | 74件 | 大分県 | 6件 |
| 岐阜県 | 60件 | 宮崎県 | 11件 |
| 愛知県 | 41件 | 鹿児島県 | 11件 |
| 三重県 | 62件 | 沖縄県 | 10件 |
| 滋賀県 | 2件 | | |

②妊娠中に食することを忌避された食物

【海・川のもの】【陸・山の生き物】【米・いも・豆・栗】【香辛料や香りのつよい植物】【果物類・野菜】【脂肪分の多いもの】【辛い・甘い・酸っぱいもの】など9つの項目に分類できた(表2)。ここでは、記述件数の多かった3つの項目について述べる。

【海・川のもの】の食物の中で、最も記載件数が多かったものは、「海草やこんぶ」である。これは『髪の毛の美しい・髪の毛の黒い子』という毛髪への影響がある一方で、『色黒の子』になるとも捉えられていた。「あわび」は、『目がきれい・美しい・丈夫・眼力がよい』など目に関する影響が述べられていた。「いか・たこ」は、『流産や早産』を誘発し、『骨なし子・胎児の骨を軟らかくする』など骨格系への影響があるとされていた。また、「たこやかに」は、『タコボウズ・タコイヤ・たこに似た子、かに子』に似た子どもが生まれると容姿への影響として捉えられていた。

【陸・山の生き物】との関連では、「兎・兎

肉」は、口唇への奇形の影響があるとされ、『口に異常、三つ口、兎唇』のある子が生まれるとあった。また、『耳が長い子、ソエボネが出来る』など骨格系に関しても述べられていた。「四つ足・牛肉・獣肉・馬肉」を食すると『四つ足の子・四つ這いの子』が生まれ、「鶏肉や鳥肉・水鳥」などは、『手足に水かきのある子、癒着した子』が生まれるとあった。これらのことから、食べた動物に似ると捉えられていたが分かる。「卵類」は、妊娠や分娩に影響し、『流産や難産の危険性』があり、難産になるとも考えられていた。また、『色白になる』と考えられている一方で、『湿疹や腫れ物』ができると捉えられていた。

【米・いも・豆】との関連では、「そば粉やそば、米粉・生米、そうめん・とうもろこし」などは、皮膚に湿疹や吹き出物がでやすいこと、胎脂や白い粉・白糊など被って生まれてくると捉えられていた。また、「栗や米・いも」などの二つ実や割れたものを食すると、『双胎になる』と考えられた。

現代では、妊娠中の食事についての禁忌とされるものは少なく、また、食に対する考えも変化してきている。今回の古文書の分析から、妊婦が忌避した食についてみると、今日では根拠が考えにくいものもある。特に、海・川のもの、卵類、柿などの果物類、香辛料などの食物が流産や早産につながる食物が多いことは、妊婦の消化器系への影響によるものではないかと考えられた。また、兎・四つ足の動物や貝類などを食することによって、児の四肢への影響があるとし、加えて、二つ実のもの・二股のものは、懐胎数に影響を及ぼすと考えられていたことから、先人たちは、食するものの形態的特徴や特性が取り込まれ、胎児や児に影響を及ぼすと考えたのではないかと推測された。

妊娠中に母親が摂取する食物は、直接的に胎児の健康に影響し、さらに、出産後も子どもの成長に影響すると考えられていたことが理解された。

表2. 妊娠中に食することを忌避された食物

| | |
|------------------|-----|
| 海・川のもの | 226 |
| 陸・山の生き物 | 129 |
| 米・いも・豆・栗 | 66 |
| 香辛料や香りのつよい植物 | 62 |
| 果物類・野菜 | 56 |
| 脂肪分の多いもの | 38 |
| 辛い・甘い・酸っぱいもの | 37 |
| 飲み物類(熱い・冷たい・牛乳・) | 30 |
| お供えもの | 7 |
| その他 | 4 |
| | 655 |

(2) 昭和から平成にかけての三世代間の離乳の移り変わり

①対象者の属性について

対象者は、20歳代から90歳代までの子育てを経験した女性13人である。(表3)

表 3. 対象者の属性

| 対象者 | 年齢(歳) | 離乳当時の職業 | 子供の人数(人) | 出産年齢(歳) | 離乳当時の同居人 | 主支援者 | 離乳開始時期(か月) |
|----------|-------|---------|----------|----------|----------|------|------------|
| おばあちゃん世代 | A | 主婦 | 6 | 22から1年おき | 夫 | 姑 | 5~6 |
| | B | 主婦 | 2 | 25.28 | 夫 | なし | 5~6 |
| | C | 主婦 | 2 | 29.36 | 夫 | 実母 | 6 |
| | D | 教師 | 2 | 29.31 | 夫 | 実母 | 不明 |
| お母さん世代 | E | 看護師 | 3 | 30.31.33 | 夫 | なし | 7 |
| | F | 教師 | 2 | 24.33 | 夫 | 姑 | 5~6 |
| | G | 教師 | 2 | 30.31 | 夫、舅姑 | 舅姑 | 5 |
| | H | 看護師 | 3 | 25.29.31 | 夫 | 託児所 | 5か月半 |
| 現代のママ世代 | I | 看護師 | 3 | 27.32.36 | 夫単身赴任中 | 実母、姉 | 不明 |
| | J | 医師 | 2 | 28.40 | 夫 | 実母 | 8~9 |
| | K | 看護師 | 2 | 27.32 | 夫 | なし | 不明 |
| | L | 教師 | 2 | 27.29 | 夫 | 姉 | 6 |
| | M | 主婦 | 1 | 20 | 父母弟2人 | 実母 | 5~6 |

対象者の離乳食を与えていた当時の職業は、主婦、教師、看護師、医師であり、子どもの人数は、対象者 A さんが6人、対象者 M さんが1人、その他は2~3人であった。離乳当時の同居人は夫がほとんどであり、舅、姑、父、母、弟なども見られた。主支援者は実母、舅、姑、姉などであり、離乳開始時期は5か月以降がほとんどであった。

②世代間で変化があったことと受け継がれていること

インタビューの内容から354の有効なデータを得た。一データ毎に内容を吟味し分析を行った結果、【ベビーフードの使用】【離乳食の作り方の工夫】【離乳食への考え】【子育て期の支援・情報源】【大変だった点】【心がけたこと】【離乳食の実際】【離乳食への子どもの反応】の8つのカテゴリーが得られ、さらに世代間で変化があったことと受け継がれていることに注目して分類した。(表4)

以下カテゴリーごとに結果を述べる。カテゴリーを【 】、キーワードを《 》で表記する。

【ベビーフードの使用】では、おばあちゃん世代は、ベビーフードはほとんど使っておらず、《何でも手作り》、お母さん世代では、《忙しい場合など状況に合わせて使用》、現代のママ世代では、《種類が豊富で活用している人がほとんど、手作りのものと併用》していると記述内容に変化がみられた。

【離乳食の作り方の工夫】では、おばあちゃん世代・お母さん世代は《柔らかく、潰す》、現代のママ世代では、《柔らかく、細かく》に加えて《冷凍、レンジ》などの工夫が見られた。

【離乳食への考え】は、おばあちゃん世代は《子供の様子に自然に合わせる》という考えであり、お母さん世代は、《丈夫に大きく、好き嫌いなく》と変化があり、逆に、現代のママ世代では《離乳に対して神経質、まじめに作りたい》という考え方の変化が見られた。

【子育て期の支援・情報源】では、どの世代も、《本》からの情報や《家族》の支援を受けていたが、お母さん世代では《離乳食の表示、託児所の先生、テレビ》、現代のママ世代ではさらに《健診、インターネット、友達からの支援や情報》であった。

【大変だった点】では、おばあちゃん世代では特に大変だったという話が聞かれなかった。お母さん世代では、《作ること、離乳食を与えるタイミング》、現代のママ世代では、同じく《作ること》の他に、《子どもの機嫌や体調が不安定であること、汚く食べられること》というように現代になるにつれて変化が現れた。

【心がけたこと】では、どの世代も、《衛生面》を心がけており、さらにお母さん世代では、《無添加・無農薬》、現代のママ世代では《アレルギー》というように心がけたことが増える傾向が明らかになった。

【離乳食の実際】では、どの世代も《お粥》を与えており、《すりつぶし、大人の物からのとりわけ》というスタイルはそのままである。

【離乳食への子どもの反応】では、おばあちゃん世代は《何でも食べた》、お母さん世代は《結構食べた》、現代のママ世代は《大体食べるが、嫌いなものは出す》と捉えられていた。

表 4. 世代間の変遷

| | おばあちゃん世代 | お母さん世代 | 現代のママ世代 |
|-------------|------------------------------|---------------------------------------|------------------------------------|
| ベビーフードの使用 | ほとんど無く使っていない、なんでも 手作り | 種類が少なくおいしくない、忙しい場合など 状況に合わせて使用 | 種類が豊富で活用している人がほとんど、手作りのものと併用 |
| 離乳食の作り方の工夫 | 柔らかく、細かく、つぶす | 柔らかく、つぶす | 柔らかい細くなるもの、小分け、 冷凍、レンジ |
| 離乳食への考え | 自然体 | 丈夫に大きく好き嫌いなく育つように | 神経質、まじめに作りたい |
| 子育て期の支援・情報源 | 本、新聞、実母、姑、姉 | 本、雑誌、離乳食の表示、友達、託児所の先生、テレビ、姑 | 育児雑誌、検診、実母、インターネット、保育士、友達 |
| 大変だった点 | なし | 作ること、離乳食を与えるタイミング | 作ること、子供の機嫌や体調が不安定であること、汚く食べられること |
| 心がけたこと | 清潔、消毒 | 衛生面、栄養面、食べやすさ、 無添加、無農薬 、新鮮なもの | アレルギー 、栄養面、バランス、熱すぎない温度、衛生面 |

本研究は、離乳に関する変化を明らかにすることを目的に、昭和から平成に離乳を行ってきた三世代の母親に対して、インタビュー調査を行った。

その結果、特に三世代間で変化が見られたものは、【ベビーフードの使用】【子育て期の支援・情報源】【心がけたこと】であった。他の【離乳食の実際】【離乳食の作り方の工夫】【離乳食への子どもの反応】【離乳食への考え】【大変だった点】については、三世代間に渡ってずっと受け継がれているものもあれば、各世代間で特徴が見られるものもあることが分かった。

おばあちゃん世代では、ベビーフードを使っていた人はほとんどいなかったが、お母さん世代、現代のママ世代と現代になるにつれて、ベビーフードを使用しているものと思われる。「手作りのものと併用」という発言や「忙しい時」「外出する時」にベビーフード

を使用するなど、特に働いている母親において、必要に応じてベビーフードを取り入れていることが理解できる。以上のことから、離乳食の実際の方法や考え方は、時代とともに変化してきているのだと考えられた。いつでも手軽にベビーフードが手に入る現代では、目的や状況に合わせて活用していくことが必要だと考えられる。

(3) 看護学生と栄養学を学ぶ学生の離乳食に対する意識

①対象者の属性について

A 県内の看護学生と栄養学を学ぶ学生を対象として無記名式アンケート調査を依頼し、237名の回収を得た。そのうち、女子学生および市販の離乳食に関する考え方についてすべて記入しているもの201名分を分析の対象とした。

対象者の背景は、看護学生133名、栄養学を学ぶ学生68名であり、平均年齢はそれぞれ 20.5 ± 0.9 、 20.6 ± 0.7 であった。現在の生活状況について、看護学生は、63.6%がアパートで自炊であり、家族との同居が20.5%であった。栄養学を学ぶ学生は、家族との同居が67.2%、アパートで自炊が28.4%であった。看護学生にアパートでの自炊者が多かった。

②食事の状況について

食事を規則的にとっているかについて、朝食は、看護学生・栄養学を学ぶ学生のそれぞれ63.9%、76.6%が摂っていた。両学生間での有意差はなかった。昼食・夕食は、9割以上の学生が摂取していた。1週間における外食の有無について、看護学生が96.2%、栄養学を学ぶ学生85.3%で看護学生に外食の割合が多く有意差があった。さらに、1週あたりの回数も看護学生 4.1 ± 3.8 回で多かった。

インスタント食の利用は、1週あたり看護学生 2.9 ± 2.5 回、栄養学を学ぶ学生 2.9 ± 2.3 回であり有意差はなかった。食事をとるときに重要視していることは、両学生ともに「栄養バランス」「量」「安価であること」であった。

離乳食については、看護学生は「ほとんど知らない」が30.8%あり、栄養学を学ぶ学生は「少し知っている」が80.9%を占めた。両学生間で有意差があり、栄養学を学ぶ学生に知っていると回答した割合が多かった。

また、離乳食の手作りについて「こだわりがあるか」「こだわらないか」でみたところ、看護学生は72.3%、栄養学を学ぶ学生は85.3%が「こだわる」と回答した。手作りの離乳食にこだわりがあるかどうかについて両者間で χ^2 検定を行ったところ有意差があった ($p < 0.05$)。残差の結果から、栄養学を学ぶ学生にこだわりが多かった。しかし、将来、市販の離乳食を利用するかについては、看護学生は68.4%、栄養学を学ぶ学生は57.4%が「利用する」とあり、有意差はなかった。

市販のベビーフードは、農薬や抗生物質の含有について、看護学生は77.4%、栄養学を

学ぶ学生72.1%が安全であるとは思わないと回答し、さらに、「食品添加物」に関して、それぞれ91.7%、83.8%が安全であるとは思わないと回答している。しかしながら、衛生面や離乳食の準備の簡便さ、外出時の利便さは、両学生ともにそのように思うという回答が多かった。

食は人の健康を維持するうえで最も重要なものであり、特に乳児の食事は、味覚の発達や食への好み、成長への影響は大きいと考えられる。本研究対象者の女子学生において、市販の離乳食の用い方について、それぞれの生活の中に、うまく取り入れて利用していくという考え方が伺われた。乳児からの食事にも関心をもてるよう教育上でも工夫が必要と思われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①太田ゆきの、川村まりあ、三世代間の離乳の移り変わり—昭和から平成—、弘前大学医学部保健学科看護学専攻卒業研究論文集第10期生、2014、45—48 査読無

[学会発表] (計1件)

①五十嵐世津子、北宮千秋、高間木静香、蝦名智子、「日本産育習俗資料集成」にみる妊娠中に忌避された食物とその理由の分析、第55回日本母性衛生学会、幕張メッセ国際会議場(千葉県千葉市)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

五十嵐 世津子 (IGARASHI SETSUKO)
弘前大学・保健学研究科・准教授
研究者番号：40250625

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

北宮 千秋 (KITAMIYA CHIAKI)
弘前大学・保健学研究科・准教授
研究者番号：10344582

(4) 研究協力者

太田 ゆきの (OTA YUKINO)
川村 まりあ (KAWAMURA MARIA)